



女の声を見た気がしたが、空耳だったようだ。

私は夜の静けさのなか、歩き出した。

定規を当てたような迷いのない直線の道は暗く、風は冷たかった。右手には風に揺れる雑木林がある。左手には生け垣が続き、陰鬱このうえない眺めだ。

また女の声を見た気がして、ふり向くか迷う。

迷いつつも、自然と早足になっていた。

——さい。

進むとくだんの声が遠のいて、私は安堵した。それほど緊張を強いる声だった。テレビかなにかだろう、とふり返りたくなるのをこらえる。あたりの民家に明かりは灯っていない。暗がりでもラジオでも聞いていたに違いない、と思うことにした。

家へ急ごう。家は安全だ。息をつき油断できる。

急いた気持ちを自覚するとともに、自分の腕が粟立っていると私は気がついた。

また、怖いから帰りたいのだ、とも私は気がついてしまった。

考えるのをまず止めよう。思案すればするほど、怖気づいてしまう。子供でもあるまいし、夜道が怖いなど滑稽だ。

帰路を急ぐ姿は、私以外なかった。終電車も行った時刻である。暗いのも静かなのも無人なもの、すべてうなずける。

——ください。

ふいに声が近くに聞こえて、悲鳴を上げそうになった。

足をはやめる。怖い、と明確に感じた。ざわりと風が木の枝を揺らし、大袈裟な音を立てた。夜陰になお重苦しく黒い樹影に、あおられるように走り出していた。

——てください。

がつつと靴音も荒々しく私は走った。声の内容は不明瞭だというのに、やけに近くで、はっきりと聞こえていた。鮮明に耳朶を打つ。くださいださいくださいてください。くり返しくり返し、声は私を追い打つようだ。

自分の喘鳴を聞きながら、道の暗さにめまいを覚えた。

街灯はこんなにもなかったか。

そのとき足と肺に限界が来た。まるぶように地面にへたりこみ、咳きこむとこめかみが脈打って頭痛がした。鼻腔が焼けつくように痛んでいて、涙がにじむ。

呼吸が落ち着いてみると、女の声はまったく聞こえなくなっていた。すると怯えていた自分に腹が立った。やり場のない憤りに、鼻息も荒く立ち上がったが、踏み鳴らした足音がまた女の声を呼びそうでひやりとする。

そしてまた、ひやりとした自分に怒る。怒ったまま早足に歩き出した。風の音だけが聞こえ、ひとの気配はない。暗い暗いと感じていたが、それもそのはず、路肩の街灯はすべて消えていた。天上の月光ばかりがこうこうと鮮烈に明るい。どういことだ、と訝しむうちに怒りは消え、さみしさが胸にわいた。ひとりであるよるべなさが身にしみた。怒りでも恐れでもさみしさでも

、私の足をはやめさせる要因になるに不足はなかった。

住まいであるマンションが見えたとき、安堵するどころかぞっとして息を呑んだ。

どこにも照明が灯っていない。近隣もそうだ。明かりのないマンション——それがなにかに似ている、と思ったと同時に、古び捨て置かれた墓所を連想した。青みを帯びた月光を浴び、灰色の建物は暗く沈黙している。

帰宅すればそこが安全である、という信念が揺らぐ前に、と私は裏手の階段に向かった。自宅である三階の角部屋へは、正面ホールを通るより近道になる。私は階段を駆け上がった。コンクリートと鉄の階段にけたたましい音を残し、私は玄関を開ける。顔がほころぶ。ドアが閉まる前に、習慣で玄関の電灯スイッチに手をのばしていた。

電気がつかない。

え、と壁のスイッチを見たとき、背中で玄関のドアが閉まった。闇に落ちた室内で、かちかちとせっかちにスイッチを動かすが電灯はつかない。そこでようやく私は、帰路の暗さについても納得できる答えに至った。

停電——広域で長時間の停電が起きているのではないか。

私はきびすを返し、廊下に出た。もし停電が起きているのなら、闇に沈んだ街並みもひとの気配さえ消えた静寂も、もっともだろう。

どこもかしこも暗く、慎重に廊下を渡り玄関ホールへの階段をおりる。横目に見たエレベーターは稼働していなかった。やはり停電だ、とそこで私はひとつうなずいた。

ホールにその旨を知らせる張り紙はないか、と足を運んだのだが、肉眼であたりの様子がわかるほど光量はなかった。事情を訊こうにも深夜であり、管理人を訪ねるわけにもいかない。

こうなっては、事情を知るには朝になるのを待つしかないか——そのとき私の身体が硬直した。何故、と理由を探す間に、ぞろりと全身が怖気だった。耳が拾った、むしろやわらかく聞こえた声に、私は悲鳴を噛んだ。

——てください。

女の声は近かった。即座に私は走り出していた。呼吸を忘れて走り、我が家に駆けこんだ。施錠し靴を乱暴に脱ぎ、奥の部屋に転げながら飛びこむ。

私の耳はどうにかなってしまったのか。

もつれた足が空を蹴り、膝を折って手をついた。痛みにもうめき、肩で息をし、怯えて涙ぐむ自分に冷静になれ、と胸でくり返した。

こたつの天板を支えに立ち上がる。やや暗さに慣れた目で、部屋にいるのが私だけか確認した。幾度も首を巡らせ、影の吹きだまりに身を置く恐ろしさに息を呑んだ。カーテンを開ければ月光が射すかもしれない、とカーテンに手をかけた。

——てください。

声がした。

カーテンの向こう、ベランダに声の主がいる気がした。カーテンをにぎった指に力が入る。執拗に追って来る声は幻聴か、この世ならざるものの権化か。いずれも私としては遠慮したかった。

ここは私の部屋だ。怖いものがあるはずがない。怖いことが起こるはずがない。怖いものはここにやって来られないはずだ。

——してください。

落ち着けばきっと理由が見つかるはずだ。私は胸に手を当てて呼吸を整えようとした。鼓動が激しい。

——してください。

どうしてだろう、声は背後から聞こえてようで、私はきつく目を閉じた。そして後悔する。目を開けるのが恐ろしい。——うしてください。声がなにをいわんとしているか、聞き取れてしまうのが怖かった。——うしてください。いやだ聞きたくない、と奇妙な声に対して思う。——うしてください。懇願に似た私の思いを無視して、声は聞こえて来る。——うしてください。夜道をついて来た声が怖い。正体を探るなんてとんでもない。消えてくれ。私の膝から力が抜けへたりこむ。——うしてください。くちびるがふるえて、こぼれた息もひどくふるえていた。声が聞こえる位置が一瞬読めず、うっすら目を開けた。——うしてください。私は身を縮めた。

声は頭上から聞こえて来た。逃げねばと思うが腰が抜けて立ち上がれない。——うしてください。這おうとすると、こたつ布団に触れた。恐怖に支配され正体を失いかけていた私は、やりたいもない行動を取ろうとしていた。——うしてください。私はこたつのなかに逃げこもうと、身をいっそう縮めふるえる手でこたつ布団をめぐった。

こうこうと灯る赤い灼熱の光が、目に痛かった。

頬に熱を感じる。私は言葉にならない声を、歌うような声を上げていた。

そこに女の首が転がっていた。目が合って、首は笑った。

ぜつぼうしてください。

女がいった。赤い光が暴力的に光度を増し、私は目を閉じた。

ぜつぼうしてください——声はどこからでもなく、私の頭で響いた。

○ ○ ○ ○

うたた寝をしていたようだ。

重いまぶたを開けると、目のたき火の炎は衰えつつあった。億劫だったが立ち上がり、私は背後の車から燃料と焼却物の入ったビニール袋を持って来る。

薪の間、半分焼けた女の首がこちらを見ていた。

私の殺した恋人だ。

うたた寝のなか、誰かが夢でなにかいっていた気がする。うつろな目を向ける頭を無感動に眺めながら考えるが、微塵も思い出せない。そうしているうちに、夢中のできごとなどどうでもよくなった。

燃料とまきを足し、首が灼熱に包まれるのを見る。

——てください。

ふと声を聞いた気がしたが、無人の山中と確認してある。凶行の処理にこれ以上の場所はない

。

疲労で濃んだ意識は、なんだか絶望にまみれている気がした。